



熊本地震
から10年

病院建て替えの事態に陥った熊本市民病院 職員のモチベーションを維持し 新病院の経営改善に取り組む

2016年4月の熊本地震で甚大な被害を受け病院避難の事態に陥った熊本市民病院では、本震発生の13時間後には入院患者を全員避難させた。一部の入院機能と外来で診療を続け、19年に「災害に強い病院」の拠点として移転、建て替えを完了。25年には災害拠点病院の指定を受けた。建て替え工事中、機能縮小のため遠方も含む他院や行政機関に出向した職員たちは新病院完成とともに同院に戻り、災害に強い病院の運営に尽力している。地震発生当時院長(病院事業管理者兼務)を務め、現在は顧問として職員を導く高田明氏に話を聞いた。

地震発生時の同院の建物は、79年完成の南館、84年完成の北館、2001年完成の新館で構成され

きた。

地震発生時の同院の建物は、79年完成の南館、84年完成の北館、2001年完成の新館で構成された。地震発生時の同院の建物は、79年完成の南館、84年完成の北館、2001年完成の新館で構成された。

熊本市民病院は1946年に熊本市立民生病院として開院。同院のある熊本市東区は、熊本市の市街地と、熊本地震で最も被害を受けた熊本県益城町の間に位置する。診療科目は34科、二次救急を担い、地域の基幹病院としての役割を果たしていた。小児と周産期医療には特に力を入れており「総合周産期母子医療センター」では超低出生体重児を多く受け入れ、心疾患等の合併症を有する乳幼児や救急救命管理を要する異常妊娠の分娩、合併症のあるハイリスク妊婦を県内外から数多く受け入れてきた。

耐震基準と向き合うなか
熊本地震に襲われる

2度の震度7の地震で
病院避難の事態へ
地域連携を駆使し
スムーズな避難を実現